

第1部の認定証授与式に続く懇談会「学長！理事！！ちょっといいですか？」では、以下のような活発な質疑応答が行われました。

※出席したアドバイザー等のメッセージはページ後半に掲載しています。

①創成科学研究科（理）D3学生

Q. 個人の研究内容を発表する機会はありますか？

異分野融合研究で、グループでの活動概要は発表でよく聞くのですが、個人の研究についても最近興味を持っています。そういう個人の発表をする機会があるといいなと思いますが、いかがでしょうか？

A. 堤学長特命補佐

ご提案ありがとうございます。是非そういうこともやりたいなと思ってはいるのですが、キャンパスが離れていることもあり、なかなかみんなが集まるのが難しいという現状があります。

例年、秋口くらいに博士学生の交流会（SPRING 選抜学生以外の博士の学生さんにも声をかける会）をやっており、その席の前座のようなところで少し個人の発表をやっています。逆に「こういう発表会をやりたから何とかならないか」という具体的な企画を学生側から提案していただけると非常にありがたいです。

人を集めるタイミングが難しいので、ぜひ上手く運営（幹事）してくれる人がいれば、我々としては予算を含めて全力で支援します。吉田地区で開催するとき、常盤（工学部）から人を呼ぶための交通手段等の支援もできるので、是非企画していただけるとありがたいなと思います。

②創成科学研究科（理）D1学生

Q. 異分野融合研究における「楽しさ」や「やりがい」とは何ですか？

異分野融合研究の難しさというのは、まだ実際にやったことがないので想像上でしかないのですが、何となく難しいのだろうなというのは想像がつかず。一方で、楽しさというのも当然感じるものだと思います。先ほど兵動先生が「ワクワクしている」とおっしゃられましたが、具体的にどういう風なことが異分野融合で楽しくて、どういう風にその楽しさを発展させ、やりがいにしていったらいいかを教えてくださいたいです。

A. 兵動アドバイザー

「ワクワクする」というのは、私の口から滑り出たことかもしれませんが、本当に直感で思っていることなんです。博士後期課程の皆さんは、1人1人の専門が本当に深いです。それぞれの分野でやられている研究の片鱗を聞くだけで、私は純粋に感動します。

最初は「この技術、自分の研究に何か使えないかな」という吸収したい気持ちから始まります。そのうち「自分のやっていることを相手に提供できないかな」「これで一緒に有名になれないかな」など、色んな欲やアイデアが働くわけです。そうやって色々コミュニケーションを重ねて、お互いの強みが合致して一本の大きな木になるように努力していくプロセスが、非常に楽しいところであり、やりがいだと思います。

A. 谷澤学長

「皆さんなぜ研究をするのか」という根本に戻ると、新しいことを知りたい、見つけたいという基本は『好奇心』だと思うんです。山口大学は『発見し・はぐくみ・かたちにする』ということを理念に掲げています。異分野融合も、まさに新たに何かを発見しようという試みです。

周りの異なる分野を広く見て、ぜひ好奇心を持ってみてください。そこから何かをはぐくんで形にしていければ素晴らしいですが、まずはすべての研究のスタートである『好奇心』を持つこと。それが楽しさに繋がると思います。

③創成科学研究科（工）D3 学生

Q. 将来（助教等）の研究費獲得やキャリアパスの不安へのアドバイスは？

研究環境について、我々は今 JST から年間相当量の研究費（生活費・研究費）をいただいて活動ができていますが、その後アカデミアに進んで助教になられた先輩方の声を聞くと、「研究費がなかなか心もとない」という不安の声をたくさんお聞きします。学生生活の中だけでなく、その後のキャリア、キャリアパスや人生設計、進路設計について、アドバイスや講義のような形で何かを学ぶ機会を開講していただけると助かるのですが、その点いかがでしょうか。

A. 佐藤学術研究・産学連携担当理事

学術研究担当の理事として回答いたします。確かに将来にすごく不安に感じると思います。ただ、非常に今若い人たちが恵まれているのは、国が用意している「若手院生でもアプライ（応募）できる研究費」が昔に比べてかなり多いということです。その情報はすべて大学のホームページに出しています。是非ともそれをリサーチする力を今のうちにつけてください。

例えば、今大学で走っている超大型予算の広げる枠で『AI for Science（SPReAD）』というプロジェクトがあります。これは年間 500 万円（正味の間接経費等を除いて自分の研究室に入るのが約 350 万～360 万円）という大きなグラントですが、なんと大学院生も応募できます。

大学としてはかなり周知をしたつもりだったのですが、第 1 回目の蓋を開けると、大学院生からの応募予定者は学内でわずか 4 人しかいませんでした。これは国が「AI を使える場を広げよう」としている予算なので、「これまで AI を使ったことがない人」が、自分の研究に AI を取り入れるアイデアを応募するのが正しい道なんです。例えば、獣医の学生さんが「犬猫の歯周病の判定を AI にやらせるアイデア」を出すなどです。自分で企画して応募したら、今年是全国で 1,000 件当たります。第 2 回目の公募が 6 月中旬から約 1 ヶ月間走りますので、指導教員とも相談し、情報を調べる力を持ってぜひ応募してください。

もう 1 点、異分野融合についてですが、大学の教員も毎年秋に『山口大学知の集い』というものを開催して融合をやっています。自分の研究を発表して、文系・理系、医学・工学・獣医学の先生がつながる場です。ぜひ皆さんもそれを見に行ってください。「この先生と一緒に何かやれないか」「自分の技術を提供できるんじゃないか」という出会いがあります。若くても、すでにお金（潤沢な研究費）を持っている 40 代・50 代の先生とつながれば、共同研究として予算を共有してもらうことも可能です。「自分で探して獲得する力」と「できている人と上手くつながる力」の双方を磨いていってください。

④創成科学研究科（工）D1 学生

Q. 異分野融合研究が論文採択（成果発信）に繋がった事例や支援は？

これから異分野融合研究に挑戦していく上での質問です。研究をやるからには世界に研究成果を発信したい、つまり論文を出したいということになりますが、過去の異分野融合研究で、上手くいった論文採択に繋がった事例などがあればご紹介いただきたいです。

A. 堤学長特命補佐

キャンパスが離れている物理的な制約もあり、最初の顔合わせから短期間でテーマを決めて論文に結びつけるのは、過去の事例を見ても容易ではないケースが多かったです。そのため、今年度は新体制として「昨年のグループ活動をそのまま継続して深掘りするグループ」も設けています。継続チームから大きな成果が出ることを我々も期待しています。

また、学生は参加費無料で参加できる『超異分野学会』というものが東京や大阪で年に一度開催されています。もしグループ活動から成果が出て「出展したい」「この学会で発表したい」という話になれば、旅費は本プロジェクトから別に全額支援します。我々もそこはすごく期待しています。超異分野学会には色々な分野の研究者や企業人がたくさん来ているので、そういう人とつながるとまた視野が広がるはずですよ。ぜひチャレンジしてください。

さらに、博士の学生が個人で応募できる様々な財団の旅費支援や研究費支援もあります。今のうちから申請書を書く練習をしておく、将来自分がアカデミックポジションに就いて科研費を書くときにすごく参考になります。「審査員がどこを着目して採点しているか」がだんだん分かってくるようになります。

⑤司会から

Q. 企業とアカデミアそれぞれのキャリア、学生への期待について

A. 野崎教育学生担当理事

キャリア形成の話が出ましたが、昔、兵動先生が担当されていた授業の時に、私が企業から大学へ移った自身のキャリアの話をしたら、授業後にわたしの話に興味をもってくれた学生さんが熱心に質問をしてきました。

「企業に就職して研究開発業務を行う」ということは、企業がお金を出して金儲け（利益）に繋がる研究をやるわけですから、100%自分の好きなことができるわけではありません。そこは割り切る必要があります。ただ、今の企業は若い人の柔軟な提案をよく聞いてくれます。

一方で、大学に残り「アカデミアに進む」となると、好きな研究ができる代わりに、先ほど佐藤理事が言われたように『お金（研究費）をどうするか』という自分の力で稼ぐ苦しみが生れます。

私が当時それをどう乗り越えたかという、企業の時に付き合いのあった他大学の教授の先生方と色々話をして、仲間に入れてもらい共同研究をさせてもらった、つまり「人のつながり」に助けられました。

皆さんへの最大のアドバイスとしては、「博士課程の間にどんどん人のつながりを作っておくこと」です。それは、このシン・文殊グループの活動を含め、今からもう始まっています。将来必ず役に立ちますし、勉強になることがたくさんあるので、是非それをやってほしいと思っています。頑張ってください。

アドバイザー等の自己紹介（当日のメッセージ）

堤宏守 学長特命補佐（事業統括）

「私はこの3月まで工学部の教員をしていましたが、今は特命補佐という形で皆さんのプロジェクト全体の支援をしていきます。何かありましたら相談に乗りますので、いつでもお声がけいただければと思います。普段は吉田キャンパスにいますが、宇部の方に家がありますので、常盤キャンパス（工学系）の学生さんもぜひ気軽に声をかけてください」

兵動正幸 アドバイザー（工学部・医学部担当）

「アドバイザーの専門として、私は工学部の土木（社会建設）の地盤を専門にしています。構造物を支えたり、自然災害を防止したりする分野です。私たちの分野でも、昔はどちらかというとマクロな（大きな）挙動を扱うことが多かったのですが、最近よく『マルチスケール』『マルチフィジクス（複数の物理現象が相互に影響し合うシステムを同時に解析・設計する手法）』という言葉を使います。これは明らかに、別の異分野から導入された技術なんです。

皆さんのそれぞれの分野でも、同じように研究が広がっていると思います。そういった意味で、皆さんは今大きなチャンスです。私も皆さんと話しているときにワクワクします。皆さん、目の前に宝があるという気持ちで、まずは1年間頑張っていたいただきたいと思います」

内野英治 アドバイザー（理学系・東アジア研究科担当）

「私は吉田キャンパスにおり、創成科学研究科の理学系と東アジア研究科の学生さんを担当します。私の専門の一つに脳神経科学があるのですが、脳神経科学というのはまさに総合的な分野です。色んな分野の人間が集まってきて、色んな分野の人と話をしないとイケません。

まさにこれから皆さんが『シン・文殊グループ』で集まってやる活動と同じです。今回は文系の方も集まると思います。そこで色んな話をして、色んな事を参考にして、ご自身の研究領域に取り込んでいただければと思います」

内海俊彦 アドバイザー（共同獣医・農学部担当）

「皆さん、洋々とした将来があると思うんですが、このプロジェクト『SPRING』は、国からの大きなお金が皆さんに投下されているんです。ですので、他の 3 人の先生は優しいのですが、私はちょっと厳しいことを言います。

必ず、シン・文殊グループのメンバーとして必要なことはやってほしいんですね。例えば『半年に 1 回、必ず業績を所定のフォーマットに従って提出いただく』『グループごとの活動報告を必ず定期的にしていただく』というルールです。私の方からお願いしますので、それをきっちり守ってください。厳しいようですが、国からお金をもらって研究するんだということを肝に銘じて、ぜひ頑張ってください」